

現在の景気：県内景気は、緩やかな持ち直し傾向が続いている。非製造業では、観光や飲食などの対面型サービス業の回復が続いているほか、百貨店の販売も底堅く推移している。製造業では、海外需要の鈍さなどから生産活動の足踏みが続いている。この間、建設需要は、住宅着工に建設コスト上昇等の影響がみられるが、交通インフラ整備や物流施設などの官民プロジェクトの進展などを背景に、総じて底堅く推移している。

3か月程度の見通し：非製造業は、物価高や人手不足の影響を受けつつも、対面型サービス業を中心に持ち直しの動きが続くとみられる。製造業では、海外需要の鈍さの影響が続くとみられる。

個人消費：①上向き。②3月の県内百貨店（存続店ベース）の売上は、前年同月比2.7%増と5か月連続で前年を上回った（19年同月比では6.8%減）。卒入学式シーズンを迎え、オケージョン需要に対応した衣料品や雑貨などの動きが好調だった。4月入り後は、気温上昇に伴い春夏物衣料などが動き出した。3月の自動車登録台数は、同20.3%減と3か月連続で前年を下回った（19年比では24.0%減）。認証試験不正問題の影響などから軽自動車（前年同月比21.9%減）が前年を大幅に下回ったほか、一般乗用車（同19.7%減）も小型自動車（同38.9%減）を中心に減少した。

住宅建築：①一進一退。②3月の新設住宅着工戸数は前年同月比13.3%減少し、2か月連続で前年を下回った。貸家（同17.8%減）、分譲（同6.8%減）、持家（同5.7%減）、いずれも減少した。

設備投資：①堅調。②国土交通省の「建設着工統計」（非居住用）によると、23年度累計の工事床面積は前年度比2.8%減少し、工事予定額は同16.6%増加した。ひまわりベンチャー育成基金（調査研究部門：千葉経済センター）による県内企業186社アンケート調査（3～4月実施）では、23年度の設備投資実績（全産業）は22年度を77.1%上回って着地した。24年度の期初計画額は、23年度比1.9%増となっている。

公共工事：①増加基調。②23年度の県内公共工事請負額は、前年同月比4.5%増加した。市町村（同4.8%減）、国（同0.3%減）は減少したが、独立行政法人等（同17.5%増）、県（同10.2%増）が増加した。

輸出：①持ち直しの動き。②3月の成田、千葉、木更津3港合計通関輸出額は、前年同月比10.4%増と5か月連続で増加した。成田空港は、半導体等製造装置（同28.1%増）やIC（同6.4%増）などが増加し、同9.7%増と4か月連続で前年を上回った。千葉港は、有機化合物（同42.3%増）や石油製品（同6.9%増）などの増加により、同27.9%増と7か月連続で前年を上回った。木更津港は、鉄鋼（同22.8%減）や粗鉱物（同3.3%減）などが減少し、同10.0%減と14か月ぶりに前年を下回った。

生産活動：①弱含み。②2月の県産工業生産指数（季調済、2020年=100.0）は、99.2（前月比2.5%上昇）と3か月ぶりに上昇した。化学工業（同5.0%低下）などは低下したものの、鉄鋼業（同8.4%上昇）や石油・石炭製品工業（同4.1%上昇）などが上昇した。

観光：①拡大。②県内の観光・宿泊施設では、好調な入込が続いている。桜やネモフィラ、ツツジなど、見頃を迎えた花々を楽しむ人で県内各地が賑わったほか、「ふなばし三番瀬海浜公園」では、毎年恒例の潮干狩り（4月24日～5月29日）がスタートして連休を中心に多くのファミリー客が訪れた。この間、東京ディズニーシーでは、6月に誕生する新エリアに関連したスペシャルイベント「ドリーミング・オブ・ファンタジースプリングス」（4月9日～6月30日）が始まり、オープンに向け期待が高まっている。

雇用情勢：①足踏み。②2月の有効求人倍率（季調値）は、前月と同水準の0.95倍となった。有効求人数（前月比1.5%減）、有効求職者数（同1.8%減）がいずれも減少した。

【トピックス】

- 千葉市は、市内事業者の脱炭素経営を後押しすべく、「千葉市脱炭素推進パートナー支援制度」を立ち上げた（申請受付：4月15日～）。取り組み項目の宣言と達成状況の報告を行う「パートナー」事業者は、補助金の申請資格や一部公共事業における入札参加資格などが与えられる。これに加え、温室効果ガス排出量の削減目標の設定・報告も行う「パートナープラス」事業者は、中小企業資金融資制度における優遇措置も受けられる。
- B.LEAGUE「千葉ジェッツふなばし」の新ホームアリーナ、「LaLa arena TOKYO-BAY」がJR南船橋駅近くに竣工した（4月17日）。地上4階建て、延床面積3万1千㎡、最大収容客数約1万人の大型多目的アリーナで、スポーツイベントや音楽ライブなどの会場としても活用が予定されている。
- 成田国際空港によると、23年度の国際線外国人旅客数は1,789.2万人（前年度比2.7倍、19年度比8%増）と、円安を追い風に過去最多を更新した（4月25日）。国際線日本人旅客数は678.5万人で、前年度比では98%増と大きく伸びたものの、コロナ禍前の19年度との比較では50%減にとどまった。